



松蔭 校長室だより

2024年5月2日発行

一校長から保護者の皆様へのメッセージですー

松蔭中学校・松蔭高等学校

校長 浅井直光

神よ 変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。変えることのできないものについては、それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する知恵を与えたまえ。

(「ラインホルド・ニーバーの祈り」より)

予測を超える速さ 社会の急激な変化

大活躍中の大谷翔平選手ですが、昨シーズンの初め頃、新ルール「ピッチクロック」の違反第1号となったというニュースがありました。このルールは、ランナーがいない時には、ピッチャーがボールを受け取って15秒以内に投球動作を始めなければ「ボール」が宣告されるというものです。新ルールを適用された彼も戸惑ったのか、一瞬怪訝そうなジェスチャーを見せていました。そういえば、近所で開催されていた小学生のバスケットボール大会を観戦する機会があったのですが、テーブルオフィシャルズ（計時や得点記録など審判を補助する係）の机の横に見慣れぬ係の人が立ち、左右の手にそれぞれ黄色と赤の旗を持って振ったり下ろしたりしています。ルールに詳しい方によると、最近設けられたマンツーマンコミッショナーという役割だそうで、ジュニア世代の選手の個人技術を育成するために取り入れられたとのことでした。「ルールもプレーの技術もどんどんアップデートされているんですよ。」 観客も常にアップデートしてスポーツを観戦する必要があるなあと感じた出来事でした。

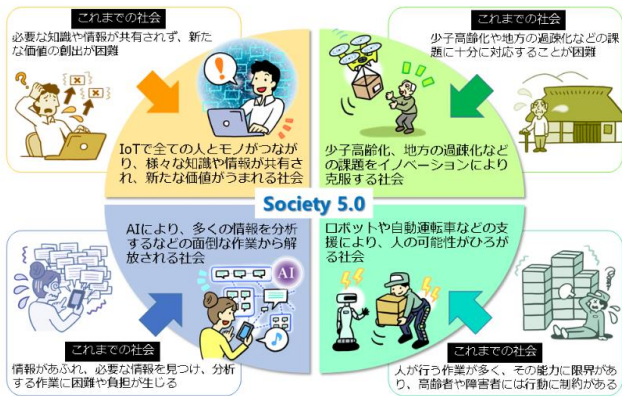
2016年、政府は「Society 5.0」を発表しました。2030～2050年には「超スマート未来社会=Society 5.0」が到来し、IoT（インターネットと家電製品・車・建物などがつながる技術）やAI（人工知能）、クラウド、ドローン、自動運転、無人ロボット等々が日常生活で活用できるようになるということで、18世紀の産業革命に匹敵するほどの社会変革となるだろうと取沙汰されたものでした。（下図イラスト①②参照）

私ごとですが、ちょうど校長に就任した年でしたので、このイラストを見たり資料を読んだりしながら、当時の在校生が卒業後10年ほど経てば、このような社会で活躍しているのだろうと想像したものでした。

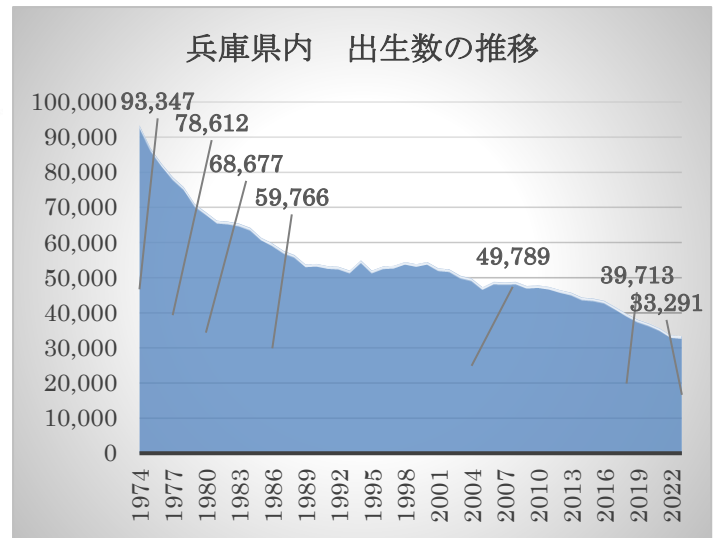


①文科省 HP「Society 5.0の実現に向けて」より転載

Society(ソサエティ) 5.0が実現する社会



②内閣府 HP「Society5.0 が実現する社会」より転載



③兵庫県内出生数推移グラフ(兵庫県発表資料より作成)

ところが2年前の Chat GPT 登場の驚きも束の間、生成 AI が画像、音楽、映像作成、株価予測までこなすようになりました。IoT 家電が次々と登場し、システムのクラウド化が進み、ドローンによる災害対応や物資運搬も実用化されつつあります。これまでの20年間ほどの期間の社会の変化とは比較にならないほどの急激な変化が、加速度的に私たちに迫っています。「Society 5.0」が2030年を待たずして実現しつつあります。

「Society 5.0」は、少子高齢化、人口減少に対応できる社会の仕組みでもありますが、少子化については、政府予測をはるかに上回るスピードで進んでいます。2019年の厚生労働省の発表によると、国内の出生数は減少傾向もあるがその進行はまだ緩やかな状態で、2040年に74万人になると推計していました(2019年 厚労省「出生数、合計特殊出生率の推移」)。ところが、報道でもご承知のとおり、昨年2023年の出生数は75万人。5年前の予測が一挙に17年の前倒し。問題は深刻です。

上の③グラフは、半世紀前からの兵庫県内の出生数の推移です。第2次ベビーブーム時代(1970年台前半)の9万人台をピークに減少傾向にあったものの、1980年代後半以降は5万人台が続いていました。しかし、21世紀に入り、現高3生徒が生まれた頃には4万人台となり、2018年に3万人台、昨年(2023)年には33,291名にまで落ち込みました。全国の状況と同様に、右肩下がり少子化が加速しつつあることがわかります。

ところで少子化の進行は、県内の私立中学校38校、私立高校51校にとっては、生徒数の減少に学校存続の問題に直結します。平成元年に中学受験をした学年の出生数は約78,000人。この数字が私学の定員を充足させ、各学校の経営は安定していました。11年後には昨年の出生者が小6です。近い将来、本校を含めて各私学はさらに厳しい現実と向き合うこととなります。

学校のアップデート

今後の教育には、上述の激しい変化を意識した「学校のアップデート」が求められているように思います。2018年、文科省が「学校 Ver.3.0」を公表しました。その2年前の「Society 5.0」公表を受けてのことです。それによると、学校は、『勉強』の時代(学校 Ver.1.0)、『学習』の時代(学校 Ver.2.0)を経て、今後は「Society5.0」の社会を生きぬくための『学び』の時代(学校 Ver.3.0)に入る必要があるということです。勉強、学習、学び、と用語を使い分けながら、それぞれの段階の学校の役割を定めています。すなわち、これまでの学校は、全員が一斉に同じ内容を勉強し、テストで得点するために暗記中心の『勉強』を生徒に強制していました。次の段階は、生徒が主体的に活動し、協働・対話を通じて新しい価値観に触れるような『学習』を進めることで「Society5.0」に向かう準備を行う『学習』の時代でした。学校ごとに特色なり「濃淡」なりがありますが、これがおおよそ現在の学校の姿であり、次の『学び』の時代の学校へと向かいつつあります。「『学び』の時代」の学校は、「Society5.0」を生き抜くため、学び方(ICT やコンピュータースキル、プログラミング知識、オンラインのスキル等)を身につけ、知識・情報を連

結、統合する力や、それらを社会の課題に繋げて解決策を考えたり、新たな価値を生み出すビジネスモデルを創造したりする力、AIが苦手とする共感力や豊かな人間性を育みます。その『学び』の保障について、各学校が責任を負っているのです。

松蔭では、2020年度以来の中学校ストリーム制、昨年度からの高校コース制を年次進行で導入しながら、「学校 Ver.3.0」の実現をめざす教育実践に挑戦しています。一人一台のタブレットを前提にした各授業でのオンライン活用や、高校LS/AAコース「言語探究」授業、中学GS/高校GLの「GL探究」授業があります。年次進行により、取り組みに深まりと到達点が徐々にですが目に見えるようになってきているように感じます。また、AIは、スクールモットーやキリスト教主義教育、聖書の教えについて語る事ができても、一人ひとりの松蔭生のTPOに応じた立ち居振る舞いや生き様そのものを表現したり、真似したりできません。

今春の高校卒業の記念文集に一人の卒業生が次のように記していました。

「スクールモットー “Open Heart, Open Mind”。松蔭に受け継がれてきたこの精神で、私はダイバーシティの扉を開いた。」
文章のタイトルは「私の財産」。スクールモットーは、彼女自身の一部となり、その人となり周囲の人が松蔭の在り方を感じる瞬間があることでしょう。学校がアップデートしていけば、培われる生徒の「財産」は、未来に向けた広がりを見せ、豊かさを増します。そしてそのことは同時に、少子化の時代の学校存続の鍵になると見えています。保護者の皆様のご意見をお聞かせください。



<高2GL 探究授業の企業教育の成果物「松蔭タータン」リボン。

先月の文化祭当日、生徒自身が校内で販売しました。>